

研修報告書 No 46

研修施設：梶原町立梶原病院

津野町立国保杉ノ川診療所

今回「高知医療再生機構」の力添えのもと梶原町立国保梶原病院で平成 25 年 2 月 4 日~3 月 1 日研修させて頂いた。高知県での地域医療研修について以下の三つの視点から研修報告をする。

- ・ 県外在住医師から見た高知の地域医療の状況
- ・ 研修内容に対する意見
- ・ 今回の臨床研修で得たと考えられるもの

高知の地域医療は自分が考えているものとは違った。自分の地域医療（特に僻地や島嶼）の印象は、一度ある地域の医療を担うとそこから抜け出すことが容易ではなくなり、土地に縛られ閉塞・疲弊してしまうというものであった。東京都の地域医療奨学生枠での三宅島診療所研修、および杏林大学第六学年時クリニカルクラークシップで自由選択した八丈島病院での実習を経験していたが、そのような印象は変わらなかった。

高知のシステムは県全体で管理されていて、医師を短期間でローテーションさせながら配置するシステムであった。この僻地医療協議会の行うシステムでは、医師が疲弊しにくく、また地域や時期によつての医療格差を少なくなるというメリットがある。住民と医療者の二者共に win-win な関係を明確に目指しているという点で感嘆した。

医師がある程度短期間でローテーションすることに関して、医師側からも住民からも理解が得られれば、医師の絶対数さえ足りればスムーズに運営できるシステムだと思われる。そういった理解が得られないケースも多々あると思うが、時間をかけて現システムを浸透させていくしかないのかもしれない。

このような素晴らしいシステムに挑戦しながら、実際のところは高知県に残る研修医は少ないようであり、人材の確保の面では厳しそうであった。若手医師が、高知の医療の数年先を見据えて活動している高知フェスに参加することができた。若手医師・自分と同じ研修医・そして学生が、高知の医療を「自分たちでどうして行くのか」という観点で真剣にディスカッションしプレゼンしている姿に圧倒された。高知フェスの中でも「5年後面白いことになっている」と宣言していたが、そうなるであろうエネルギーを感じ取れた。このような活動を続けることによって医療者の確保も潤沢なものになる可能性を十分に感じ取れた。

研修内容については大学病院ではまず得られないような研修内容も多く勉強になった。

創傷処置をこれだけ濃密に行う機会はなく、自分の診療の幅が広がった。診療所や施設での外来診察や訪問診療のほかにも、地域包括ケアにまつわる会、病院と町民をつなぐ会や、おらんくのまちづくりフォーラムなどにも数多く参加でき貴重な体験となった。

特にケアプラン会では医療とは何かを再確認させられた。医師、看護師、PT、保健士、ケアマネージャー等が一同に集まり、退院後のプランをいろんな角度から見つめ、本人にとってのベストを導き出そうと話し合う。入院していない人も、気になるケースがあれば話し合い情報を共有し、その人にとってのベストを導き出そうと画策する。

この会では病気を診るのではなく、その人本人を診ることがむき出しになる。医師として病気を診ることは当然であるが、同時に人を診ることも同様に必須条件である。それが医療のあるべき姿だと思う。どこでどういった形であろうと、医療を通じて社会に貢献する際になくしてはならない「当たり前の核」を感じ取ることができた。

構原病院での地域医療研修は有意義なものとなった。人と人のネットワークの網で人を包み込む、その網の一本一本は優しきで出来ている。病気も人も診る医療を通してそんなネットワークの一員になりたいと思う。